



「アスンシオン日本人学校」

戸田市立戸田第二小学校
河西 誠

パラグアイ

パラグアイは南米大陸のほぼ中央にある内陸国で、面積は日本の約1.1倍、人口約700万人。学校のある首都アスンシオンは、ブエノスアイレスを河口とするラプラタ川～パラグアイ川を1,630kmさかのぼった所にあるが、学校所在地の標高は64mしかない。東京から国際便を最低三回乗り継いで35時間以上かかり、日本人学校88校の中で時間的に最も遠い学校である。産業の中心は農牧業で大豆、牛肉を輸出している。なお、水力発電では世界一の発電量を誇るイタイプダムをブラジルと共有しているため、電力の輸出額は大豆に次いでいる。1936年、日本から第一陣の移住があり、戦争で中断の後、戦後の移住再開により現在5800人の日系人が住んでいる。

公用語は二つあり、スペイン語とグアラニー語。パラグアイ人はのんびりしており、町の至る所でテレレ（ジェルバというお茶の葉に氷水を入れたものの回し飲み）をしている光景が日常である。



アスンシオンの教育環境

ブラジル、アルゼンチンに挟まれた内陸国で、両大国の陰に隠れた存在であり日系企業の進出も少なかったが、造船会社(大河用の平底バージ船建造他)、自動車関連工場等の進出を契機に人件費が高い両国からパラグアイへ進出する日系企業の動きが始まった。アスンシオン日本人学校には、この二十年ほど民間企業の子弟の在籍はなかったが、平成27年度よりその在籍が始まった。それまでは大使館員子弟、JICAパラグアイ事務所職員・専門家の子弟が大半であった。

また、日系人の組織である日本人会では、日本文化及び日本語能力を維持向上させるため、国内各地に日本語学校を設立し、運営している。そのためパラグアイの日系人の日本語能力は南米の中でも極めて高い。現在、日系人の医師も非常に多く、スペイン語の習得が十分でない数年程度の赴任者・駐在者にとって、日本語で医療行為を受けられるという恵まれた地域でもある。



パラグアイの現地の学校は、基礎教育九年間（日本の小・中学校に相当）が義務教育となっている。公立校の授業料は無償であるが、教科書をはじめ学校教育にかかる費用の大半は保護者負担である。経済力のある家庭の子どもは、私立校やインターナショナルスクールに通う。

現地校の授業はすべてスペイン語で行われるが、もう一つの公用語であるグアラニー語の教育にも力を入れている。近年、英語の授業を教育課程に取り入れている学校が増えている。

アスンシオン日本人学校 ～あいさつが元気 笑顔が元気 心が元気～



アスンシオン日本人学校は、1982年に日本人学校として設立され今年度で創立34年目を迎えた。校舎は、台湾とユーロ代表部の両大使公邸に挟まれた住宅地の一角に位置し、敷地内には、マンゴー、アボガド、チリモジャ、アセロラやラパーチョといった亜熱帯の木々が鬱蒼と茂り、芝生の運動場、体育館、プールを備えた恵まれた環境の下、充実した教育活動を行っている。教育目標を「自ら学び自ら考え 心豊かな たくましい児童生徒の育成」とし、知・徳・体のバランスある教育に

心掛けるとともに学力向上に重点を置いた学校教育に努めている。

子供たちは朝7時50分に登校すると「今日一日よろしくお祈りします。おはようございます。」と大きな声であいさつし、職員全員とハイタッチをして一日が始まる。スクールバス出発の夕方4時10分まで毎日7時間の授業を実施し、標準時数を大きく上回る時数を確保している。授業では、少人数指導の利点を生かし、個に応じた指導を徹底している。

毎週木曜日の放課後勉強会(16:15～17:30)、月一回の土曜勉強会(9:30～12:00)を開き学習意欲の喚起を図っている。その結果、自らの課題に応じて自主的・積極的な学習に取り組んでいる。時期によっては英検・漢検の対策学習、入試レベルの学習に励んでいる。

スペイン語の授業(年に3回現地校との交流行事では、スペイン語での活動)、現地人教師による英会話をしているが、昨年度からはさらなる英語力の向上を目指し、小学4年以上の学年で中学校教科書を使った英語の授業も取り入れている。その結果、大半の児童生徒が英検資格を獲得している。



夏場の水泳授業は、派遣教員全員がプールに入り、その徹底した指導により児童生徒のほぼ全員が100mないし200m個人メドレーができるようになっている。

学校教育の特色は、30年間の積み重ねで出来上がった様々な学校行事の活用。その中の一つである移動教室は、パラグアイを知るための大切な行事である。2泊3日で日本人やドイツ人移住地に行き、移住記念館や福祉施設等を訪ね説明を受けたり交流するとともに長時間の移動となるバスの中で中学生のギターに合わせて全員で合唱したり、小学部低学年の

児童と中学生が一緒に泊まったりする経験は、一生忘れられない思い出となっている。

ふと中庭に目をやれば、まぶしく輝く太陽のもと、校章にも描かれているハチドリがブーゲンビリアの蜜を吸っている。

